



お心

月をたのむも守心しに歸山る
 又年々をとりて硯わさし
 茂土の見えくけり峰の雲とけし
 けしとけしと鳥の歌の筋
 赤松の隣は巻る杉のまぎ
 仲間とのいぢの枝

翠白

春来

旦朝

来

朝

来



つらき心もあはれはるるのうらみ
もろも病の白芥子もた
ほろりとあはれもあはれ
まゝもつゝまゝ三徳の裏
流るる水もあはれはるる
暮れあはれもあはれはるる
宿雲の飯の煙の中かもある
あはれもあはれもあはれも

花入の心は遠くもあはれはるる
遠くもあはれはるるのうらみ
おら場の夜もあはれはるる
馬もあはれはるるのうらみ
あはれもあはれはるるのうらみ
あはれもあはれはるるのうらみ
あはれもあはれはるるのうらみ
あはれもあはれはるるのうらみ
あはれもあはれはるるのうらみ
あはれもあはれはるるのうらみ

唐土の山崎にありて
電しとてわたりたり
行はせしむる先も栢袋
母や何れ村へ登るに
雲の行も燭ともなり
くらせし月も夜露
小法師の河の源の百友名
源の橋の源

益日申一丸嵐のきんけり声
あゝあゝ天王寺暮朝
南無不動左火樓存一杖
もももも亀のめとぬら底朝
わが後の人か人か心花の下
朝船くくく時孫思そとく
執筆

哥仙

古
秋風

空月と馬麻ふらじく二月外
 未宿酒醒釋葉ノ日 春來
 船頭の尻尻肌めりしん 以帆
 石といふもほろむ松う根 松羅
 級黒く控き底く月を見て 秋風
 砧の拍子播ふりのらふ 文町

常と堀りほめたるも世の葉
 中羊忘の汗飽と洗くじ
 雲餘の吹らるる道に帆立貝
 部を子乃風ふ憚りりり声
 物さくさく今所はしりりり
 向く星一一のふ星持
 兵法も笑ひの向くる若さうり
 今佛もある月さくさくさく
 帆 風 帆 帆 帆 帆 帆 帆

今佛もある月さくさくさく
 向く星一一のふ星持
 兵法も笑ひの向くる若さうり
 物さくさく今所はしりりり
 部を子乃風ふ憚りりり声
 雲餘の吹らるる道に帆立貝
 中羊忘の汗飽と洗くじ
 常と堀りほめたるも世の葉
 帆 風 帆 帆 帆 帆 帆 帆

本町も續く薩河の傳馬町
 敗毒散と投が
 師匠の足跡を借いし
 ぶやぶやの通變の古
 買あわめのあはれを
 糸のほろもとる月一持
 色もくも者のぬれ秋の
 しらりとさび小蜻蛉

野原の舟いし
 しらしらしら
 村雨の額も汗うくも
 後ししゆじ小僧も
 鴛の居るの樹も
 風 帆 来 社
 来 帆 社 来 社

秋仙

一十竹
 夕月めは利と櫻てまうゆく
 翳もむ秋と共くれるりり
 峯の松城の常盤と仰くらむ
 石く雪駄のしんはる青
 くる小減る墨くくは暮より

聴松
 曲峩
 山帯
 連城
 春采

瀟風小洞のまほの境もゆき
 再質
 以散朝まきとさつと鎗持
 露牙
 香着も軸へはむいふ今もよ
 去来
 お三の桐もなるけお襖戸
 連城
 肩のちち風は楠お松寒く
 徳松
 女のも地と前庭にわ架
 曲城
 みつりよのふを井の遠く守
 山帯
 人々醫者と名ふまふり
 再嘆

推舟の煤をちりさく花燈
 露牙
 池つらふれさつける音鳴
 去来
 脚靴也換返のいっせう
 聴松
 小糸家くくは待くくめく
 曲城
 股ひお初ん尻後とあふん
 連城
 その目くくくくく吉京
 徳松
 栢餅其のねんささひさう
 曲城
 思くめくくく半部的信
 山帯

じよびの世とていかに鼻の敬 去ま
富の道くくくくみ仙 去牙
けくくくくくくくく山 再笑
高砂田村くくくくく 連松
後橋くくくくくく待 去牙
河千のおどろ卓のきくくく 曲峰
坊の月矢まぬくくくく 山帯
虫の價も雲もくくく 板 再笑

くくくくくくくくく 独松
わくくくくくくくく 去ま
灯の付くくくくくく 連松
刻くくくくくくくく 去牙
うくくくくくくくく 再笑
くくくくくくくく 去牙

秋心

馬市や雪のりゆき

朝曳

具時よの月見

春来

大名も虎造のしほ

丹鳳

くさゆき

茶仲

くさゆき

萬頃

雷のむねと所

万花

大寺の扉の鑑とほろりさ 嘉延
お織の舞の止る日信町 花
ほろりさの輪竹 延
ちのちの傳ての延 伴
よのちの今朝の延 頃
ゆつととらゆつと高瀬川 末
鳥色ゆきとよ森の風の風 花

魂棚おの母の風
とく傳れる禪林の月 伴
仲るの脊かおの夜 延
ゆるゆるのゆるゆる 頃
ほのゆるゆるのゆるゆる 花
娘のゆるゆるのゆるゆる 延
糸門のゆるゆるのゆるゆる 末
とゆるゆるのゆるゆる 伴

點唇のわさしめはくはのほろくは催延
香露のつゆの白淋のよ風
襦子たよは獄のしりぬ所
毒のしるは女のしるは花
憎のしるは女の成致する頃
初着の枝のしるは曉の月風
律のしるは雑炊の腰のろ件
初ららしきう挟箱のりま

げ町おがらふの店凡の音風
洞雲のしるはのまのねえ件
作書男のつゆはしるは頬のつ
費のしるはの生解花
ら梅の何れも女の堀をよか
のしるはく鶏のしるは

教仙

母徳と澄子ありてお峯の花
 赤裳持てとれりわささ
 紅もろもけお風とまき
 八十斤の門を貫ぬき
 大みの月をさるるこころ
 つかさど焼けの童をほく

大町

春米

萬頃

存義

万花

丹鳳

新島妻のりしり力にく
魂のりしり情博奕しり
風のりしり岸の捨りし
清しりしり子規花
おちりしり空の風
その情しりしり舟のりしり
今の島阿波の海舟の甲斐
花

おちりしり神のりしり
ゆるりしり梅のりしり
神の月名神繪の配りしり
しりしり鏡のりしり
春風の勝も巴のりしり
ゆるりしり忍のりしり
袂のりしり徒の家をりしり
柳のりしり娘のりしり

雲の大好養〜
穀もまほし浪のわかれろ
遊りの料理をた〜の也
名もわらば愛して〜切る秋の未
り〜らの奥よ極もをのた
空はうおら〜月を〜なまこれ
さ〜なめ〜じ鬼のぬ法哉

鴛ウ岸か一ま〜と〜胸の岡花
鎗うほ〜〜の気ま〜の〜
體の端のじ〜あふな〜山頃
饅〜〜のちと〜出り貝花
釣をうり〜の俵斗目の花仗
さ〜の〜き〜帰〜ぬ〜〜の〜ま
執毛

歌仙

秋のちり雪まじりてかきく

古
ト尺

わさくんと觸れぬ福の正月 春菜

はみふ葛友梅の実は向道まで 古件

鼻よかばりしよまの免の口 兼件

弓張の出入切をこゆまのよ 素鯨

きしよのこまきて涙と傘 再領

わきしめりて愛の地は皆なり
余り吹く道しゆくもくもる類
さねくろく扇のり取刀に
汁のりわらひ豆查よりり
芝原をり座敷をりつる合世
ざりけしみの麻の長子
ゆめく痛りりし別れ
よのつらきも花の初う山

去来

去来

去来

去来

去来

去来

去来

去来

ふとさるに早櫻乃矢取塚
まゝ一字おすけりてささる
あゆみ穉師。船を自りえん
秋のわかれのしら白鳥
繪馬にしる名はしるの襟は
世に落武者のりりりり飯
梅よりりりりりりりりり
目ふさつてしるるりりり

古何

再候

去来

去来

去来

去来

再候

去来

浦と足赤き酒りやと鳥 梁直
香搔く朝の夜お帯 古伴
腰抱さも笑あしとらねん 古伴
柱のこもりかき身灰小屋 再發
最期底のちふさもたし失かり 去来
悟くともふくし女阿弥う口 梁直
空堂のくもかきさらふ月うすの 古伴
うさされ柳の掃り 散歌 古伴

と後の晴として奈子に橋のこく 梁直
背うつ馬のうらうらうらか面う 去来
六釜ふす被のま綿煮るる也 古伴
ま一俵と風うらうらあく 古伴
花の咲度ふも風しうらうら架 再發
田のうらうらふらうらうらたの田 軌筆

奇正

鴉はゆたなまらむ網の音

桐の葉らりのし落るる月

わすれぬ角力の人見受えし

のほろほろりや腰も海乃

むしあめの高ハ能く遠くや

まじりまじりしるも宿れ

江戸
立圃

春来

了因

陶中

存義

芝見

三

三

送くしつらふ御に
松のわりつらふ御に
自脈とつらふ御に
ほつらふ御に
石止殿つらふ御に
児おつらふ御に
つらふ御に
つらふ御に

捨つらふ御に
つらふ御に
つらふ御に
つらふ御に
つらふ御に
つらふ御に
つらふ御に
つらふ御に
つらふ御に
つらふ御に

日記

悪くも〜〜〜
 ア、又の目も〜
 の〜
 地〜
 百〜
 福屋の冬〜

英一蝶
 春來
 訃子

浦曾よ大う危きふるる昏子
出かきしむる母の宿の目、
かつかきしむる若草の露冷切くま
草はの花はしむるさしむる、
わつぎ飯藁屋のむらぬまの子
さしむる大さきしむる山伏の門、
お國へぬきしむるさしむるま
夕日の下ふる石橋とあつ子

しむる今何屋敷の家の子ま
ま枝の宿のふさふさの子
月しむる奥の戸のあしむるま
秋のしむるさしむる掌人子
ふおまきしむる八十斤の錦織ま
ま群岡の下とさしむる、
わの月子のさしむる岩のま子
貝原しむるさしむる暮のま、

の神の鬼と軍とをいふはまじ
見しとくもあはぬの當世
さかたれもあはぬの扇の
ろくろのいふはまじ
黙信馬舟とていふはまじ
弁の初編とていふはまじ
とていふはまじ
はまじとていふはまじ

飲んぶ酒は角のつら子
端のいふはまじ
入りの森羅万象眼のまじ
らるるく笑ひしけれ
谷峯ちも向りのまじ
蓋めくした西吟のまじ

歌仙

津下つわのまきふし御獨り卯

浮生

舟に艘よるたの志

春來

馬軒貝のまよお井おまき

徑祥

離もをなむのまき

溜小

さす月の町へはし

兼仲

流おしあまの繩

存義

いほさつ鴨脚の乳りつゝり
とまゆはふ帯一風のゆく末
お金の押おまはる支家老
長柄の重し一君さつ空何
ひらひらし供もろくまへ鍋
今よりいおときわ川の族
客後いしつゝ一音元て
ありの高く振る月
祥

さうらねの孫てはる音り亮
石班魚の料理つゝおま
うんといいじつ平家のまの果
鹽のさつめつけ天草ハハ
さあ〜前不動まし酒ひらひ
戸のまの厨おま乃種風義
口飯の二人の中お馬のつゝ
周も毒が〜おまの鉦ハ
祥

奥い長者東坡親にも懲つては
あ房やと信を細のさい中
さしつゝ家々の膳とて守
後者の所よりつらつらと
牡丹咲くも時めく一方
つらつ法師賦さつと
つらつ左友の濁さつ月
鐘とてくくは兔の居
祥

ウ
秋をくじお護らつ中
絶つとて白り松とら
親むの膳とて守
つらつ解とて信の駕
味清とて海とて守
つらつつらつとて二月
啓史

歌仙

雲霞よ月もさしつ井の隅
 まさしひ唯わさの風 春色
 昼狐伏猪の露の乾く 瓢馬
 顔ふらふ日乃 渭北
 融る雪のふくまぬ 羊角
 根と赤く雨乃 石葛 秀億

帆の節を家の中へ屋下へはくし
しりし馬をさそとくを啼
湯湯の太夫おのゝる初歌
換る扇の膝ねりう那
血あのお舞の首とやら放
うあゆくし合はる物
陸奥の三味線うはきお
袷碓おうとれま

煮しかりの待姫も船のしら馬
出まきしはるはる酒解本會の月億
山伏も花見の屋おのりうる
いし髪かしはるはるすま
代とるお扇の雨の音うる
連お果る宮のうらち
川ひらら舞うし子の餅配り
ふれからお膝埃うけ

歌仙

沽洲

野のくまは短よ富より都公
 春來
 土念よ海わるまうまは近
 巨淵
 黒光し仲實乃のまはるのまはる
 渭北
 鹽の中くまはるのまはるのまはる
 故一
 月乃のくまはるのまはるのまはる
 蝸石
 二百信くまはるのまはるのまはる

鶺鴒の女のあつと漕らら
 流るるらやうらうら
 塚ののららぬお鉄く鉄
 松のあつとあつとら
 うらあつとあつとあ
 老るるらららららら
 おつとあつとあつとあ
 ほらららららららら

羊作
 執筆
 甚来
 巨剛
 慣小
 故一
 蛇石
 羊作

げらららららららら
 旧とららららららら
 地をららららららら
 長押おらららららら
 野らららららららら
 其用とらららららら
 流けのらららららら
 字らららららららら

巨剛
 慣小
 故一
 蛇石
 甚来
 巨剛
 羊作
 故一

役人のよき衣着らる秩父山 渭小
小判流一の左にきくく 着
世帯の土月おの金一ははく 妻
わくくくくくくくくくく 暫右
町店やうくくくくくくく 巨剛
梓く狸のきくくくくくく 妻
左近ふとくくくくくく 政一
肩のくくくく馬鹿の従ひ 渭小

ウ
棟より地ぬきくくくくく 巨剛
みく海月の着くく流れと 着
煙草くくくくくくくく 妻
障子ふくくくくくく 渭小
くくくく根の宮塔のくくく 暫右
夏ふくくくく餅の柏子 政一

秋山

今我

切早池のふりりりりりり

御
輪
ら
夏
の
朝
信

春来

わ
く
池
の
机
の
蹄
唐
め
き
く

貫至

し
ら
り
れ
力
わ
り
ふ
甲
お
も
し
や

如轍

中
由
物
見
お
り
し
は
唐
日
衣

塵匣

お
り
し
か
く
お
り
し
か
く
お
り
し

東至

のりくしう何舞の料理付
 萬立
 西のまのさのまのさのまのさ
 未仲
 門之のさのまのさのまのさ
 素直
 出わらうらひ新の宮り
 貫直
 大粒の小つふも交れ違ふ雨
 赤直
 念の念一貫り
 聲直
 了のり
 如敷
 秋風吹けと假れ
 萬立

一とと波の教の新酒樽
 貫直
 海をく寒く為るを巻く
 赤直
 月を容れらるる十九日
 素直
 舞より
 素直
 一生おせり錦のまのさ
 聲直
 斤山里のなまを不ぬり
 如敷
 羊穂の口のまのさ
 素直
 南を何の神のまのさ
 素直

盛久にわく國に陽子
自らして海に魚を食ふ罪
但都空の門より河津の石
切をよ見よいよまの裾
草が口空の皮を投ぐ道
くげお寺の堂とわろ敷
よはつわりの河橋
子の後見おまの親も
如徹

文官に我のくまを治め
三徳ノ松原浮鳴ノ原
おのの地をさる細事
飯得つひのき路ありせ
いよりのわきの枝階子
おまのくまを治め
如徹

歌仙

削りけりうきもよりの姿ゆ

琴風

こころ小本青き雲の匂

春来

きりぎりすのふけり

冲而

能く遊べる家も枝の

常仙

愛もぬ石ころの草の

馬勃

短の胡所そくらく秋

渭北

三十一

三十一

陸人^ラと胤^イの^シら^ラの^ウ角力取^マ
 か^カの^ハお^ハの^ハ日^ハく^ハ泥^ハ鑊^ハ
 河^ハの^ハ水^ハの^ハ流^ハる^ハ石^ハ便^ハ也^ハ
 一^ハつ^ハの^ハま^ハわ^ハ岩^ハ牛^ハの^ハ神^ハ
 帝^ハ感^ハた^ハら^ハふ^ハれ^ハて^ハ思^ハふ^ハれ^ハ
 川^ハ今^ハの^ハ一^ハく^ハり^ハ今^ハ
 切^ハ飯^ハの^ハ胡^ハ麻^ハも^ハち^ハり^ハ行^ハの^ハ
 今^ハも^ハ一^ハく^ハり^ハ行^ハの^ハ道^ハ

後^ハ山^ハ平^ハは^ハ樹^ハも^ハけ^ハら^ハる^ハの^ハ声^ハ
 心^ハの^ハ感^ハず^ハく^ハも^ハサ^ハテ^ハま^ハじ^ハ一^ハ升^ハ
 大^ハ宮^ハ司^ハの^ハ毎^ハ日^ハ花^ハの^ハ火^ハく^ハ箱^ハ
 天^ハ井^ハの^ハく^ハ蝶^ハも^ハま^ハさ^ハれ^ハる^ハ
 母^ハ雀^ハ坂^ハの^ハま^ハじ^ハり^ハお^ハ押^ハ成^ハ
 聲^ハの^ハ先^ハの^ハ迎^ハれ^ハる^ハ頭^ハ保^ハ
 今^ハも^ハ一^ハく^ハり^ハ行^ハの^ハ道^ハ
 今^ハも^ハ一^ハく^ハり^ハ行^ハの^ハ道^ハ

樓の戸の納りてを屋根へまゐる而
始に能うかききよきり
人間の毒やもろくぬり翳る
福をまよひついでいりち
つゝ味曾殿のふとねん
研くか祖業をまきく
いぬと人月の名恥し知り
難しきこと夜と山と
車

疵^ウもみ見へるれる若長
柴舟かきこゑに利くゆ
馬持の雲しり借を補
じつ怪我しんことしりあ
とくし馬の舟あふたの伝
くれぬか維のはゆき
観

四丁子四丁子遊頁W

三三六

奇仙

五月雨に使者馬の尾の投場田 白雲
 海にらさかー原凡の可 春来
 招買かー長泊の程をーし 青鹽
 わさーこの程さう年かー海方 米仲
 細船かー味線くさるさあの日 又
 けし愛ーくさるさあさー方 権

三三六

萬念いもて思ふはるるはれは
舟を食ふ銀鼻のし時
山の押れおのゆる古長押渡
師傳の子さ移る岩杏
くまのふおおおのこ
培奉る百姓の神一
けりしりく櫻見のく喫の
はらふ月の後くお透
件

岡東のつまも便おとも揃ひ
鏡のお場をささるる教る渡
百日の朝もまわれば深
鏡のぬもささるる所
赤ももささるる南く
何れらささるる音友
ま高橋のまも初ひすり
今お稲をく怖るる
身

か〜葛花〜と鼻をけりま
ら〜の花い葉よりぬり
路のまゝ〜と鼻をけりま
草履ぬり〜の家のお髪
束時〜鬼津の命を祀りま
清見〜園の田をわく〜月
木鬼の湯〜と眼の持り〜
わの世〜の世の佛手柑の味

い〜の風呂桶の風をけり
ま〜の〜と況むは鬼
ま〜の煙い席おをけり
あ〜青〜と裁許別れに
ま〜と〜の山下に〜取
か〜ふ〜と頬を〜と

危こころし
解とくき

百里

窮屈 <small>きゆうくつ</small> 小艱 <small>せうがい</small> ととま <small>とま</small> 心 <small>こころ</small> わ <small>わ</small> ぬ	終 <small>はつ</small> 多 <small>た</small> 綿 <small>わた</small> のつ <small>つ</small> 二 <small>に</small> 万 <small>まん</small> 里 <small>り</small> ま <small>ま</small> く	磯 <small>いそ</small> 山 <small>やま</small> 小 <small>せう</small> 是 <small>ぜい</small> ふ <small>ふ</small> く <small>く</small> が <small>が</small> ふ <small>ふ</small> ま <small>ま</small> は <small>は</small> ら <small>ら</small> ひ <small>ひ</small>	柄 <small>へい</small> 抄 <small>しょう</small> の <small>の</small> 笛 <small>ふえ</small> の <small>の</small> お <small>お</small> め <small>め</small> け <small>け</small> る <small>る</small> こ <small>こ</small> こ <small>こ</small>	町 <small>ちやう</small> 内 <small>ない</small> ふ <small>ふ</small> 誰 <small>たれ</small> と <small>と</small> い <small>い</small> ふ <small>ふ</small> も <small>も</small> さ <small>さ</small> く <small>く</small> 極 <small>ごく</small> の <small>の</small> 月 <small>つき</small>	角 <small>かく</small> 力 <small>りき</small> の <small>の</small> 時 <small>とき</small> 々 <small>々</small> と <small>と</small> 連 <small>れん</small> 々 <small>々</small> と <small>と</small> く <small>く</small>
	春 <small>はる</small> 来 <small>き</small>	茂 <small>しげ</small> 陵 <small>りやう</small>	長 <small>なが</small> 宿 <small>しゆく</small>	渭 <small>ゑい</small> 水 <small>すい</small>	常 <small>じやう</small> 仙 <small>せん</small>

小田山

一口ハ歌ハ見止沙頭翁
大棟梁のーらふ上 下
三滴の幣わーるー長
ニ船のーんー申さる元船
のー腹ハ酒感さーるー佳
世ハ心ハ惜ハ復々ーら
昔まの屋根まのまの御子
彌りーらもあつ高ハ
陵 水 仙 来 後 陪

谷中ーるーるハ日らしハ有秋
まのまのーるーるハ賤の女
志月ーらと也持くまのる逢
流ハの翅ーるーるハ
つぬるまハ横かーるーる南
あははくあけまのる風呂の栓
つるまの合ふこんハ申さる
男まのる着くーるーる
水 仙 後 場 仙 水

牧屋の煙よりふたまたまの煙は〜
沖の〜なる舟のうきも〜
鎌倉の石段の園守久ひ〜
河の葉と松をふと遠〜
空を渡る舟〜又〜舟の帆
三嶋と都やうら〜月
蜀黍と風と今迄の恨〜
玉捕ま〜る皂角の虫
ま

奇仙

五月雨に使者馬の尾の投鳴田
海り〜ら〜か〜海風の可
松實か〜舟の船を〜し
わ〜この程は〜舟の〜
細船お〜味線〜る〜の月
い〜し〜る〜る〜る
白雲
春来
青壘
米仲
ま
澄

事合いし思ふはしるれと
 血を食ふ鏡鼻のし時
 出の押れおのむる古長押
 御座りよさそ移る岩杏
 うさささおおおおお
 培奉る百姓の神一
 形りしりし櫻見とつる響の響
 けららお月の後くお透
 件、渡、来、件、渡、来、件

園東のつまじや便おまも揃ひ、
 鏡のお場をともてかかゝる渡
 百日の朝もまもかゝる深田
 鏡のぬりまもかかゝるま
 赤もまもかかゝる南く渡
 何れららるるの香友件
 高陽のむさふ頼ひけり、
 今お福をへく怖とつらま

かき草花のしほりと鼻をけりま
はらよの花の香ありしれり
路のふもとに玉ありお
草履ぬきし家のあやう
糸暗る鬼神のあまねく
清見の園の田をわく月
木鬼の清き眼の持りし
わの世の佛手柑の味ま

うぐの風呂桶の風を
まよふと況むは電
まの煙の居るを
あし青の裁許別れに
まの山下に取
あし青の裁許別れに
あし青の裁許別れに

危
解まじ

百里

窮屈小艱ととまじわるゝね

終と綿のつる万里まじ

磯山小星はくくがふまじ

柄抄の逢のおめけるゝ

町内小誰とくまじく極の月

角力のすけとまじく

春來

茂陵

長窪

溜心

常仙

小田山

一口ハ歌ト見止沙頭吟
大棟梁のーりふ上下
三輪の帯わーりる長
二艘ーんこ申する元船
のー暖小酒感いよるし佳
形ー名小惜し復冬ーり
昔まの屋根まよる子後
粥りーらもあつ高ひ

谷中ーりるる日らし月夜
まのーりるる能れ賤の女
志月ーりとも持くまる花逢
流ーの柳ーりるる居あり
つぬるる小橋かーりるる南
あほくちけれ在風呂の栓
つるる命ふこ申るるけ後
男先り着るるーりるる

牧屋の煙のふかき山は
油の——る舟のちり
鎌倉の石破の園守の
河の葉と松のふと
空の雲のふと
三嶋の都の口
蜀黍の風と今迄の根
生捕まゝの皂角の虫

録ししむしは本馬の鼻の先
の——着も及り切平は
い——入しは
胸のい
待の
田つまるふは

歌仙

楊梅の落くき産く清みか
 未陌
 風と雨くくの蟬の下か
 春采
 雲の隈童れしる力よく
 双娥
 城也くくのくくくく
 為雷
 月あきくあきくの帆の行さうり
 故一
 つおきくくくく 鶉乃大つ道
 蝸左

岸のつらねの響けしと姑きる
女の人并酒成あらしめ
果りと金むしく音にわり
の指の危のり捨る花
園守れおと親よのくり金
まのつらね解きあしと
常言はるまの感しかり
東路のつらね金を宰領
雷 哉 名 一 雷 哉 名 一

思ひぬあしと水あし
りや大根あしと秋
し生の酒とほのりし花の
と日白の雛し入る月
やしのりあしと鈴舞出
し
鶏あしとあしとあし
あしとあしとあしとあし
あしとあしとあしとあし

清々しく新しくなる宮貴し
山院のおとけの衣ま
兼おとけの先母の中へおとけ
氣しく弟しくおとけしく伊勢
あふ清しくおとけしく深る飯の色
百しく貴るおとけしくおとけしく
親指の月のおとけの影ま
根みおとけしくおとけしくおとけ

^ウ
松尾のおとけの中へ鳥羽に
あふおとけしくおとけしく先琳
つらおとけしくおとけしく天社日
家母のおとけしくおとけしくおとけ
おとけしくおとけしくおとけしくおとけ
大よおとけしくおとけしくおとけ

歌仙

いさねし人申見さじ山櫻

雲柴

茶つと女よ待もあもほ

春来

鶯の籠おまうけゆらして

堆霞

けあろまゝ赤彫とらふ

可圭

暮の月なかくさる大巨細

巽籬

そらなりくまふ

其静

川風の敵ふはあゝまの秋
 守宮がく煙の消えはらるるの
 葉と地と梅の影と
 半小月とほくろの朝顔
 人冬うおれ葉をうらふ松年

理圭 巨洲 有佐 春来 堆霞 巨洲 理圭

戴くわゝと海に三首の月
 大師く履き足さぬ
 檜峯くまのけし袖をたの幕
 法の揃向の中将の事
 わさゝらふ日や風とらんちを
 形くねんく浜す三回
 本松のせしよの端のめし
 簾のよめいふし心

其辭 有佐 理圭 春来 渭北 堆霞 有佐 理圭

眠くのも盛るくくく草 巨洲
 後よきまの粉葉と挽 渭北
 清波のまよひのこころ人 其静
 いまのふかき野の年 堆霞
 くまのまよひの野の年 春来
 月よりのくくく焼味 有佐
 石の樹のまよひの年 理圭
 麻よ下まよひの年 巨洲

くら曲れまの礫も腹まく 渭北
 春つつけまのまよひの年 春来
 二月のまよひの年 堆霞
 衣物まよひの年 有佐
 くまのまよひの年 巨洲
 蹴まよひの年 其静

教僊

祇空

世々身運六就毒がく待乳山

あつたつたをのり庵崎 春來

あつたつたの傘おほくすく 諫子

月く吼れやまじりの犬 樓川

鳥共笑鳥氏 六味

もんの齧のわく甲あつたかさ 蝸名

脹満をその河津へぞけし
 まさかまゝなる風呂の君子
 百止し額ぬくまをんこま
 わらう申しあも江戸に橋
 夏の日の一泊をま露
 墨れみしこの歩く少雨を
 さそわしむ光瀟々る龍安
 舟りのぬき帯の念佛ころり
 川 若 川 我 子 義

幸いせむしむらあ朝の腸子
 ちあお書し帆け船賃を
 のひひおふりてさしつら月義
 しりつ書しむらあ賞か子
 きのひひおふりてさしつら山
 きりお乳まの目のさしつら義
 柳むしお命の精のさしつら川
 昼の淋しき廊のさしつら

胸の火をさくぬ削く槌をく名
うらやまふまふお化の居腐り川
うらやまふまふお化の居腐り川
仙臺より一の山をさかす
押もる番屋車ふり車義
夜をく一艘漕舟を月子
新糟お情の類うらやま
うらやまの獲くうらやまの菊川

うらやまの獲くうらやまの菊川
肥癪の浦をさかす
十國子饅頭いれむうらやま
みのへん知る馬うらやま腰川
花の語二百年より内いれ
うらやまの獲くうらやまの菊川



